

今月は懐かしい薬の下巻です。昭和、平成となり生活も衛生的になりました。

9.滋養サプリメント

初めてのサプリメントは、静岡市の桜花幼稚園(1960年)の3時のおやつに出たゼリービーンズだったと記憶する。あれはお菓子?、栄養補給剤?今となっては調べようもないが楽しみだった。次に思い出すのが肝油ドロップ。最初は褐色透明な粒だった。これは飲み込むだけで嬉しさはない。後にちょっと甘い不透明な黄色のゼリー錠剤になった。カワイの肝油ドロップの缶が食卓近くにあった。ビタミンA、Dが体にいいらしい。これは美味しい。2粒ほど大事に食べる。サメやタラの肝臓からとる魚油が原料と知って、いかにも日本らしいと思った。奇遇であるが、今、62歳のシニアになって、同じく魚油を原料とするDHCの血液サラサラにするサプりを飲んで認知症予防にする。

中学時代に父がエビオス(アサヒビール系)や強力ワカモトに凝って、これを水無しでバクバク食べていた。ビール酵母の味(?)がして、美味しくは無いが胃腸を強くするサプリメントとして付き合っただけで食べていた。今、成分を確認するとビタミンB群、アミノ酸、ミネラルが含まれている。今なら万能サプリメントと呼べるものだ。養命酒も中学の時に両親が飲むのを味見した。元来、アルコールに弱いからお猪口程度の養命酒でも、血圧が上がり、くクラクラする。子供が飲むものではない。この薬草をアルコールで抽出した、いかにも漢方臭が好きだった。陶陶酒も同

時期にあったが、こちらはもっと赤玉葡萄酒の味がしたと記憶している。まだワインの輸入が始まっていないのでワインと言えば赤玉ポートワイン。その製造所が藤沢にあって、だから藤沢はワイン生産量が日本一となっている。原材料のワインを世界各地から集めて、藤沢でボトリングするからボトルワイン生産量が一番多い。たいていの日本人が、ひっかかる問題である。普通、山梨県勝沼市と言いたい。

16歳を超えて高校ぐらいになると、オロナミンCの宣伝が盛んに流れるようになった。炭酸とビタミンCのちょっと甘いソフトドリンクで元気になった気分になった。これはちょっと高級な清涼飲料水として高専の学生寮でも人気があった。学生の頃はアリナミンやチョコラBBのような疲れに効く錠剤やドリンクは飲まなかった。それは40歳過ぎから、疲れたサラリーマンが頼るサプりと定義していた。今の子どもたちは、小学校からサプリメントを飲むのだろうか?ちょっと早い気がする。やっぱり30歳までは、食事から栄養素を取るのが自然です



エビオス

カワイの肝油ドロップ

エビオス（整腸作用）

アサヒグループではビール酵母を研究して、昭和3年(1928) 目黒にエビオス製造ライン完成。胃腸薬+ビタミンB群+アミノ酸のサプリメント。

カワイ肝油ドロップ

明治17年（1884年）に初めて国産肝油 Cod Liver Oilが伊藤千太郎商会（現在のワカサ）より発売された。この当時、肝油独特の臭気が残る液体薬品であった。1911年（明治44年）に、現在の河合製薬が成分を長期に安定化する技術を開発、ドロップ化に成功した。

オロナミンC

1965年2月に販売が開始された。ビタミン健康食品で医薬品ではない。

養命酒

1602年(江戸時代)「養命酒」の名で製造開始。1603年には徳川家康に献上された。1930年に東京で本格的に養命酒を売り出した当初は全く売れなかった。

アリナミンA

1954年（昭和29年）に「アリナミン糖衣錠」を発売。ビタミンB1欠乏症である脚気の治療薬の開発を大日本帝国陸軍から依頼されたことがきっかけで開発が始まったため、ビタミンB1誘導体が薬の主成分となっている。

チョコラBB

1952年に戦後のビタミンB2不足を補うため、皮膚・粘膜疾患の治療薬として発売さ

れた。ネーミングの由来は、創業者がチョコレートを使ったコーラ飲料を作ろうと考え、そのために用意した商標（チョコ+コーラ=チョコラ）だったという。肌の潤いを与えるセラミド配合が特徴。美肌効果のビタミン剤で女性に人気。

10.のど飴

風邪のひき始めは喉が痛い。風邪をひくと決まって扁桃腺が腫れる。子供の頃から扁桃腺が腫れて熱が出る。腫れて肥大化したら削除手術をすると脅かされた。まずはうがいから。幼稚園（S32年生まれ）までは番茶に塩を一つまみ入れた塩っぱいお茶でうがいする。これはカテキンの殺菌効果と塩の浸透圧による殺菌を狙ったよくできたウガイ水である。一方、医者に行くと、プラスチック容器に入ったイソジンうがい薬を処方され、独特なヨウ素の匂いをかぎながら喉の奥までゴロゴロとやった。飲んだら大変な事になると恐怖だった。

いまでこそ、のど飴が普通ですが、昭和50年ぐらいまでは、飴はお菓子、のど飴は浅田飴が定番でした。これが美味しい、ちょっと舐めすぎる叱られる。薄緑色の錠剤のクールもいいけど（缶は青色）、茶褐色のニッキ味も嬉しい。お祭りで齧ったニッキの根を思い出す。成分は漢方薬だが、全然そんな味はしない。完全にお菓子の部類だった。浅田飴と言えば、CMは永六輔が懐かしい。

もう一つ、龍角散がある。これも漢方だから成分的には浅田飴と大差ない。薄ベージュ色の粉を付属の小さじすくって喉の奥

に散布する。でも粉末なので扱いにくく飲みにくい。それがやがてトローチに変わった。トローチ (troche) は、主薬が唾液によって徐々に溶解することで口腔や咽頭などの粘膜に殺菌する製剤であるから、各社から沢山のトローチが出た。我家ではコレゲンの青い箱と薄橙色の五円玉形のトローチが救急箱にあった。

のど飴ではないが、是非昭和の紳士のお供として森下の仁丹を入りたい。男の年配の人はみな仁丹を舐めていた。甘くもない、苦い銀色の粒。完全に漢方薬の匂い。メントールのようなスースー感はない。これが口臭予防のために舐めていたと知ったのはかなり後の事でした。当時は、大人のカッコつけで父から貰った。銀でコーティングするのは殺菌効果のためと書いてある。けっこう凝った商品である。

浅田飴

名称は宮内省の侍医で漢方医の浅田宗伯による処方であることから。1915年 (大正4年) にキャラメル状の固形タイプの浅田飴を考案。11年後の1926年 (大正15年) に現在の碁石の形をした固形タイプの浅田飴が完成する。

龍角散

江戸時代後期 (文政年間) に秋田藩佐竹家の御典医である藤井玄淵によって創製され藩薬とされる。1871年、秋田藩の江戸屋敷に近い神田で藤井薬種店を始め龍角散を発売。1964年には社名を主力商品名の「龍角散」と改称。

イソジンでうがい

アメリカにて1956年に開発され、日本では明治製菓が1961年に殺菌消毒剤及びうがい薬として医薬品としての承認を得た。「イソジン」の商品名で有名。中身はポビドンヨード、ポリビニルピロリドン) とヨウ素の複合体であり、ヨードチンキよりも刺激が少ないので今は置き換わった。

仁丹

漢方薬。1905年 (明治38年) に「懐中薬」として発売された。発売当初の仁丹は赤色で大粒の物だったが、年を追うごとに改良が重ねられ、1929年 (昭和4年) に現在の形となる銀粒仁丹が発売される。



11.頭痛薬

子供 (小学校1963~69) の時に頭痛薬を飲んだ記憶はない。中学(1970~73)からと記憶する。日本人ならノーシン、ケロリンが昔からあるパッケージで、バファリンは後発のようだ。頭痛薬と書いたがここに登場した3つの銘柄の成分はアスピリン (サルチル酸メチル) の消炎鎮痛剤であるから、歯痛や生理痛にも使った。大人になると肩こりからくる頭痛がある。さすがに子供はないだろうが、今ならスマホを見すぎて酷使した眼精疲労からくる頭痛はあるようだ。これはさすがにアスピリンは対処

療法であり、根本は広場で遊ぶが一番の処方箋です。私は大学の頃からバファリンが好きで使っているが、その後エキセドリン、イブプロフェン、ロキソニンの化学構造が違う物質がでてきて、頭痛の種類によって薬の作用機構が違う。

ノーシン

1918年に、スペイン風邪の流行の折に製造販売を始めたのが起源。語源は「脳がしーんとする」、「脳が新しくなったようにすっきりする」。

ケロリン

大正14(1925)年、富山市で誕生。輸入したアスピリンと生薬の桂皮を配合した解熱鎮痛剤『ケロリン』。アスピリンの胃潰瘍リスクを低減するため、胃粘膜を保護するために桂皮を配合。

バファリン

アメリカのブリストル・マイヤーズ社が1950年代に開発・発売した、解熱鎮痛剤。日本では1963年(昭和38年)に、提携を結んだライオン歯磨(歯痛にも効く事からとされている)が大衆薬として販売を開始した。

12.総合感冒薬

さて、いよいよ風邪薬。これは奥が深い。風邪の症状といっても、咳、喉、鼻水、発熱、等々がある。医者の方箋なら患部に効く単品の薬を処方してもらう。主だった症状を緩和する2種類と胃薬の3種類を処方されて、3日ほど服用するとたいがい良くなった。風邪の症状で、何回も医

者に通う事はなかった。医者に行くほどでもない場合は市販の総合感冒薬を使う。総合だけあって、色々な薬剤を混ぜている。それだとドンダリの背比べなので、各社、鼻水用とか、発熱用とか歌っている。我が家は特に定番のブランドはなく、その時々ルル(三共)、ベンザ(タケダ)、パブロン(大正製薬)を飲んでいった。ブランドは、この3つが主だが、顆粒、粒、シロップ、大人用、子ども用と色々な形態があった。昔の風邪薬を調べると必ずカイゲンがでてくるが、我が家の救急箱には入ってなかった。常備薬は父の日本軽金属の健康保険組合から一括して安く手にはいった。単品で薬局で買うとけっこう高い。



懐かしいアンプルタイプ

とても思い出深いのが、ガラスアンプルに入った風邪薬。これをハート型の砂ヤスリで根本を切り、布で覆ってポキンとオルと首がとれる。その中に細いストローを挿して一気に飲む。ちょっと甘く粘度が高い薬くさい(それはビタミンBの匂い)液体を飲んだ。今ならガラスの破片が入る心配もあるし、ガラスの縁で切り傷も心配だ。アンプルは昭和40年に大流行したA型インフルエンザの時に死亡事故が起きたことがきっかけになって姿を消した。

医者に行くと、シロップの瓶があり、これが出ると嬉しかった。咳き止薬だったと思う。透明なプラの計量カップがあって、20ccぐらいを計量して飲むが、つい、多くなってしまう。市販でもパブロンを筆頭に各社から子ども用のシロップ風邪薬がでていた。今も、ツムラからドリンク式の葛根湯の風邪薬がある。

改源

1924年に神戸で「中西武商店」として創業し、感冒薬「改源」を販売。

パブロン（総合感冒薬）

大正製薬。1927年（昭和2年）鎮咳去痰薬<パブロン>発売。

ルル（総合感冒薬）

「ルル」は昭和26年（1951年）に三共から発売された。「嵐が静まる」という意味の英語のLuluが名前の由来となっている。

ベンザ（総合感冒薬）

武田薬品工業。1955年に発売。名前は化合物ピリベンザミン (Pyribenzamine) にちなむ。

13.ウイルス性疾患

今年の新型コロナウイルスのパンデミックで私もかなりウイルスや免疫の勉強をしました。ウイルスは大腸菌の1/10~1/100以下の大きさで、今は病気の中でウイルスが一番怖い。鳥インフルエンザ、ノロウイルス、人インフルエンザが有名なところ。ここではウイルス学はやりません。身近なウイルス性の病気を列挙します。SF映画で

は宇宙人が攻めてきて、地球上のどんな武器でも退治できなくても、最後に地球のウイルスで死滅するのがオチでした。それほどウイルスは怖い。この地球上の未開の地に、文明人が知らない免疫がないウイルスが一杯あるでしょう。

帯状疱疹 やりました。くるしみました。

ヘルペス 私は紫外線を沢山浴びると、時に口唇ヘルペスが出る事がある

ノロウイルス かかったことはありませんが、身の回りにけっこういます。

インフルエンザ 一度検査したことがありますが陰性でした。会社では7日間出勤停止です。

C型肝炎は藤沢市の検診で35歳以上1回必ず受診します。陰性でした。

ウイルス性胃腸炎、話には聞いています。その他にまだまだ恐ろしいウイルスがあります。エボラ出血熱、HIV、デング熱、日本脳炎、etc...

ウイルスと共存する世の中になりました。SF映画では、宇宙人は最後に地球のウイルスにやられて滅亡します。

ここまで読んで頂き、感謝します。下巻おわり。